寺じまの記

永井荷風

青空文庫

かみなりもん

雷門かみなりもんといつても門はない。門は慶応元年に焼けたなり建てられないのだという。門のない門の前を、吾妻橋あずまばしの方へ少し行くと、左側の路端みちばたに乗合自動車の駐るとま知らせの棒が立っている。浅草郵便局の前で、細い横町よこちようへの曲角で、人の込合うこみあ中でもその最も烈しく込合うところである。

ここに亀戸かめいど、押上おしあげ、玉の井たまい、堀切ほりきり、鐘ヶ淵かねぶち、四木よつぎから新宿にいじゆく、金町かなまちなどへ行く乗合自動車が駐る。

暫く立つて見ていると、玉の井へ行く車には二種あるらしい。一は市営乗合自動車、一は京成乗合自動車けいせいと、各その車の横腹よこはらに書いてある。市営の車は藍色、京成は黄いろく塗つてある。案内の女車掌も各一人ずつ、腕にしるしを付けて、路端に立ち、雷門の方から車が来るたびたびその行く方角をきいろい声で知らせている。

或夜、まだ暮れてから間まもない時分であつた。わたくしは案内の女に教えられて、黄色に塗つた京成乗合自動車に乗つた。路端の混雑から考えて、とても腰はかけられまいと思ひの外、乗客は七、八人にも至らぬ中、車はもう動いている。

活動見物の帰りかとも思われる娘が二人に角帽の学生が一人。白い雨外套あまがいでうを着た職工

風の男が一人、かす 紺りの着流しに はちじひげ 八字髯を生しながらその顔立はいかにも田舎臭い四十年配の男が一人、めかけ 妾風の おおまるまげ 大丸髻に よせ 寄席芸人とも見える角 かくそで 袖コートの男が一人。医者とも見える眼鏡の紳士が一人。汚れた襟付の袷に半纏を重ねた遣手婆のようなのが一人——いずれにしても あかさか 赤坂 こうじまち 麴町あたりの電車には、あまり見掛けない人物である。

車は吾妻橋をわたつて、広い新道路を、むこうしま 向嶋行の電車と前後して北へ曲り、げんもり 源森橋ばしをわたる。両側とも商店が並んでいるが、源森川を渡った事から考えて、わたくしはむかしならば こうめ 小梅あたりを行くのだらうと思つている中、うち 車掌が次は すさきまち 須崎町、お降りはお在ませんかといった。降る人も、乗る人もない。車は電車通から急に左へ曲り、すぐまた右へ折れると、町の光景は一変して、両側ともに料理屋待合茶屋の並んだ薄暗い一本道である。下駄の音と、女の声が聞える。

車掌が こうかくしまえ 弘福寺前と呼んだ時、妾風の おおまるまげ 大丸髻とコートの男とが連立つて降りた。わたくしは新築せられた弘福禅寺の堂宇を見ようとしたが、外は暗く、唯低い樹きの茂りが見えるばかり。やがて公園の入口らしい処へ駐とまつて、車は川の見える堤へ上のぼつた。堤はどの辺かと思う時、車掌が大倉別邸前といったので、ちやうめいじ 長命寺はどうに過ぎて、むかしならば すさき 須崎村むらの やなぎばたけ 柳畠を見おろすあたりである事がわかつた。しかし柳畠にはもう別荘らしい

門構もなく、また堤には一本の桜もない。両側に立ち続く小家は、堤の上に板橋をかけわ
たし、日満食堂などと書いた納簾のれんを翻しているのもある。人家の灯で案外明いが、人通り
はない。

車は小松嶋こまつしまという停留場につく。雨外套の職工が降りて車の中は、いよいよ広くなつ
た。次に停車した地蔵阪じぞうざかというのは、むかし百花園や入金いりきんへ行く人たちが堤を東側へ
と降りかける処で、路端みちばたに石地藏が二ツ三ツ立っていたように覚えていたが、今見れば、
奉納の小さな幟のぼりが紅白幾流いくながれともなく立っている。淫祠いんしの興隆は時勢の力もこれを阻止
することが出来ない見える。

行手ゆくての右側に神社の屋根が樹木の間に見え、左側には真暗な水面を燈火の動き走つてい
るのが見え出したので、車掌の知らせを待たずして、白髯橋しろひげばしのたもとに来たことがわか
る。橋はし袂たもとから広い新道路が東南に向つて走っているのを見たが、乗合自動車はその方
へは曲らず、堤を下りて迂曲する狭い道を取った。狭い道は薄暗く、平家建ひらやだての小家が立
並ぶ間を絶えず曲っているが、しかし燈火とうかは行くに行くに従つて次第に多く、家もまた二階建と
なり、表おもて付つきだけセメントづくりに見せかけた商店が増え、行手の空にはネオンサイン
の輝きさえ見えるようになった。

わたくしはふと大正二、三年のころ、初て木造の白髻橋ができて、橋はし銭せんを取っていた時分のことを思返した。隅田川と中川との間にひろがっていた水田すいでん隴畝ろうほが、次第に埋められて町になり初めたのも、その頃からであろうか。しかし玉の井という町の名は、まだ耳にしなかった。それは大正八、九年のころ、浅草公園の北側をかぎっていた深い溝が埋められ、道路取ひろげの工事と共に、その辺の艶なまめかしい家が取払われた時からであろう。当時凌雲閣の近処には依然としてそういう小家こいえがなお数知れず残っていたが、震災の火に焼かれてその跡を絶つに及び、ここに玉の井の名が俄に言いは囃はやされるようになった。

女車掌が突然、「次は局前、郵便局前。」というのに驚いて、あたりを見ると、右に灰色した大きな建物、左に『大菩薩だいぼさつ峠つとうげ』の幟はたを翻す活動小屋が立っていて、煌々こうこうと灯をかがやかす両側の商店から、ラヂオと蓄音機の歌が聞える。

商店の中で、シャツ、エプロンを吊した雑貨店、煎餅屋せんべいや、おもちゃ屋、下駄屋。その中でも殊あかりに灯のあかるいせいでもあるか、菓屋の店が幾軒もあるように思われた。

忽ち電車線路の踏切があつて、それを越すと、車掌が、「劇場前」と呼ぶので、わたくしは燈火や彩旗さいきの見える片方を見返ると、絵看板の間に向嶋劇場という金文字が輝いていて、これもやはり活動小屋であつた。二、三人残っていた乗客はここで皆降りてしまつて、

その代り、汚い包をかかえた田舎者らしい四十前後の女が二人乗った。

車はオーライスとよぶ女車掌の声と共に、動き出したかと思ふ間もなく、また駐つて、「玉の井車庫前」と呼びながら、車掌はわたくしに目で知らせてくれた。わたくしは初め行先を聞かれて、賃ちんせん錢を払う時、玉の井の一番賑な処でおろしてくるのように、人前を憚はばらず頼んで置いたのである。

車から降りて、わたくしはあたりを見廻した。道は同じようにうねうねしていて、行先はわからない。やはり食料品、雑貨店などの中で、薬屋が多く、次は下駄屋と水菓子屋が目につく。

左側に玉の井館という寄席があつて、浪花節なにわぶしかた語りの名を染めた幟が二、三流立っている。その隣りに常夜燈と書いた灯あかりを両側に立て連ね、斜に路地の奥深く、南無妙法蓮華經の赤い提ちようちん灯をつるした堂と、満願まんがんいなり稲荷とかいた祠ほこらがあつて、法華堂の方からチカチカと木魚を叩く音が聞える。

これと向合いになつた車庫を見ると、さして広くもない構内のはずれに、燈影ほかげの見える二階家にかいやが立ちつづいていて、その下六尺ばかり、通路になつた処に、「ぬけられます。」と横あかりに書いた灯が出してある。

わたくしは人に道をきく煩いもなく、構内の水溜りをまたぎまたぎ灯の下をくぐると、家と亜鉛の羽目とに挟まれた三尺幅くらいの路地で、右手はすぐ行止りであるが、左手の方に行くこと十歩ならずして、幅一、二間もあるうかと思われる溝にかけた橋の上に出た。橋向うの左側に「おでんかん酒、あづまや」とした赤行燈を出し、葭簣で囲いをした居酒屋から、※を焼く匂いがしている。溝際には塀とも目かくしともつかぬ板と葭簣とが立ててあつて、青木や柁木のような植木の鉢が数知れず置並べてある。

ここまでは、一人も人に逢わなかつたが、板塀の彼方に奉納の幟が立っているのを見て、其方へ行きかけると、路地は忽ち四方に分れていて、背広に中折を冠つた男や、金ボタンの制服をきた若い男の姿が、途絶えがちながら、あちこちに動いているのを見た。思ったより混雑していないのは、まだ夜になつて間もない故であるのかも知れない。

足の向く方へ、また十歩ばかりも歩いて、路地の分れる角へ来ると、また「ぬけられませす。」という灯が見えるが、さて其処まで行つて、今歩いて来た後方を顧ると、何処も彼処も一樣の家造りと、一樣の路地なので、自分の歩いた道は、どの路地であつたのか、もう見分けがつかなくなる。おやおやと思つて、後へ戻つて見ると、同じような溝があつて、同じような植木鉢が並べてある。しかしよく見ると、それは決して同じ路地ではない。

路地の両側に立並んでいる二階建の家は、表付に幾分か相違があるが、これも近寄つて番地でも見ないかぎり、全く同じようである。いずれも三尺あるかなしかの開戸ひらきとの傍に、一尺四方位の窓が適度の高さにあけてある。適度の高さというのは、路地を歩く男の目と、窓の中の燈火あかりに照らされている女の顔との距離をいうのである。窓際に立寄ると、少し腰を屈かがめなければ、女の顔は見られないが、歩いていけば、窓の顔は四、五軒一目に見渡される。誰が考えたのか巧みな工風くふうである。

窓の女は人の躡あしおと音がすると、姿の見えない中から、チヨイトチヨイト且那。チヨイトチヨイト眼鏡のおじさんとかいつて呼ぶのが、チイト、チイトと妙な節ふしがついているように聞える。この妙な声は、わたくしが二十歳はたちの頃、吉原の羅生門横町、洲崎すさきのケコロ、または浅草公園の裏手などで聞き馴れたものと、少しも変りがない。時代は忽然こっぜん三、四十年むかしに逆戻りしたような心持をさせたが、そういえば溝の水の流れもせず、泡立つたまま沈滞あせしているさまも、わたくしには鉄漿溝おほくろじぶの埋められなかつた昔の吉原を思出させる。

わたくしは我ながら意外なる追憶の情に打たれざるを得ない。両側の窓から呼ぶ声は一歩一歩急せわしくなつて、「旦那、ここまで入らつしやい。」というもあり、「おぶだけ上あがつ

てよ。」というのもある。中には唯笑顔を見せただけで、呼止めたつて上る気のないものは上りやしないといわぬばかり、おち付いて黙っているものもある。

女の風俗はカフエーの女給に似た和装と、酒場で見ると、酒場で見ると、その容貌もまた東京の町のいず手の芸者そつくりの島田も交つて^{まじ}いる。服装のみならず、その容貌もまた東京の町のいずこにも見られるようなもので、即ち、看護婦、派出所、下婢^{かひ}、女給、女車掌、女店員など、地方からこの首都に集つて来る若い女の顔である。現代民衆的婦人の顔とでも言うべきものであろう。この顔にはいろいろの種類があるが、その表情の朴^{ぼく}訥^{とつ}穩^ん和^わなことは、殆ど皆一様で、何処^{どこ}となくその運命と境遇とに甘んじているようにも見られるところから、一見人をして恐怖を感じしめるほど陰險な顔もなければまた神経過敏な顔もない。百貨店で呉服物見切^{みきり}の安売りをする時、品物に注がれるような鋭い目付はここには見られない。また女学校の入学試験に合格しなかった時、娘の顔に現われるような表情もない。

わたくしはここに一言して置く。わたくしは医者でもなく、教育家でもなく、また現代の文学者を以て自ら任じているものでもない。三田派^{みたは}の或評論家が言つた如く、その趣味は俗悪、その人品は低劣なる一介^{いつかい}の無頼漢^{ぶらいかん}に過ぎない。それ故、知識階級の夫人や娘の顔よりも、この窓の女の顔の方が、両者を比較したなら、わたくしにはむしろ厭^{いと}うべき

感情を起させないという事ができるであろう。

呼ばれるがまま、わたくしは窓の傍に立ち、勧められるがまま開戸ひらきどの中に這入はいつて見た。

家一軒について窓は二ツ。出入でいりの戸もまた二ツある。女一人について窓と戸が一ツずつあるわけである。窓の戸はその内側が鏡になっていて、羽目はめの高い処に小さな縁起えんぎ棚が設けてある。壁際につつた別の棚には化粧道具や絵葉書、人形などが置かれ、一輪いちりんざしの花瓶はなびけには花がさしてある。わたくしは円タクの窓にもしばしば同じような花のさしてあるのを思い合せ、こういう人たちの間には何やら共通な趣味があるような気がした。

上あがりかまち 櫃なかしきの板の間に上ると、中仕切りの障子しょうじに、赤い布片きれを紐ひものように細く切り、その先へ重りの鈴をつけた納簾のれんのようなものが一面にさげてある。女はスリッパを揃え直して、わたくしを迎え、納簾の紐を分けて二階へ案内する。わたくしは梯子はしごだん段を上りかけた時、そつと奥の間をのぞいて見ると、箆筒たんす、茶ちゃぶ台だい、鏡台、長火鉢、三味線掛などの据置かれた様子。さほど貧苦の家とも見えず、またそれほど取散らされてもない。二階は三畳の間が二間、四畳半が一間、それから八畳か十畳ほどの広い座敷には、寝台ねだい、椅子いす、卓テーブル子を据え、壁には壁紙、窓には窓掛、畳には敷物を敷き、天井の電燈にも装飾を施し、

テーブルの上にはマッチ灰皿の外ほかに、『スタア』という雑誌のよごれたのが一冊載せてあった。

女は下から黒塗の蓋ふたのついた湯飲茶碗を持って来て、テーブルの上に置いた。わたくしは啣くわえていた巻煙草を灰皿に入れ、

「今日は見物に來たんだからね。お茶代だけでかんべんしてもらおうよ。」と、いつて祝儀しゅうぎを出すと、女は、

「こんなに貰わなくツていいよ。お湯ぶだけなら。」

「じゃ、こんで來る時まで預けて置こう。この家は、何ていうんだ。」

「高山ツていうの。」

「町の名はやつぱり寺嶋町てらじままちか。」

「そう。七丁目だよ。一部に二部はみんな七丁目だよ。」

「何だい。一部だの二部だのツていうのは。何かちがう処があるのか。」

「同じさ。だけれどそういうのよ。改正道路の向へ行くと四部も五部もあるよ。」

「六部も七部もあるのか。」

「そんなにはない。」

「昼間は何をしている。」

「四時から店を張るよ。昼間は静だから入らっしゃいよ。」

「休む日はないのか。」

「月に二度公休するわ。」

「どこへ遊びに行く。浅草だろう。大抵。」

「そう。能く行くわ。だけれど、大抵近所の活動にするわ。同なじだもの。」

「お前、家は北海道じゃないか。」

「あら。どうして知ってなさる。小樽だ。」

「それはわかるよ。もう長くいるのか。」

「ここはこの春から。」

「じゃ、その前はどこにいた。」

「かめいど亀戸にいたんだけど、母かアさんが病気で、お金が入るからね。こっちへ変った。」

「どの位借りてるんだ。」

「千円で四年だよ。」

「これから四年かい。大変だな。」

「もう一人の人なんか、もつと長くいるよ。」

「そうか。」

下で呼鈴よびりんを鳴す音がしたので、わたくしは椅子を立ち、バスへ乗る近道をききながら下へ降りた。

外へ出ると、人の往来は漸く稠しげくなり、チヨイトチヨイトの呼声も反響するように、路地の四方から聞えて来る。安全通路と高く掲げた灯の下に、人だかりがしているので、喧嘩かと思うと、そうではなかった。ヴィヨロンの音と共に、流行唄はやりうたが聞え出す。蜜豆みつまめ屋やがガラス皿を窓へ運んでいる。茹玉子林檎バナナを手車に載せ、後うしろから押してくるものもある。物売や車の通るところは、この別天地では目貫きの大通であるらしい。こういう処には、衝立ついたてのような板が立ててあって、さし向いの家の窓と窓とが、互に見えないようにしてある。

わたくしは路地を右へ曲ったり、左へ折れたり、ひや合あいを抜けたり、軒の下をくぐったり、足の向くまま歩いて行く中うち、一度通った処へまた出たものと見えて、「あら、浮気者。」「知つてますよ。さっきの旦那。」などと言われた。忽ち真暗な広い道のほとりに出た。もと鉄道線路の敷地であつたと見え、枕木まくらぎを掘除ほりのぞいた跡があつて、ところどころ

ろに水が溜っている。両側とも板塀が立っていて、その後の人家はやはり同じような路地の世界をつくっているものらしい。

線路址の空地が真直に闇をなした彼方のはずれには、往復する自動車の灯が見えた。わたくしは先刻茶を飲んだ家の女に教えられた改正道路というのを思返して、板塀に沿うて其方へ行つて見ると、近年東京の町端れのいずこにも開かれている広い一直線の道路が走っていて、その片側に並んだ夜店の納簾と人通りとで、歩道は歩きにくいほど賑かである。沿道の商店からは蓄音機やラヂオの声のみならず、開店広告の笛太鼓も聞える。盛に油の臭気を放っている屋台店の後には、円タクが列をなして帰りの客を待っている。

ふと見れば、乗合自動車が駐る知らせの柱も立っているので、わたくしは紫色の灯をつけた車の来るのを待つて、それに乗ると、来る人はあつてもまだ帰る人の少い時間と見え、人はひとりも乗っていない。何処まで行くのかと車掌にきくと、雷門を過ぎ、谷中へまわつて上野へ出るのだという。

道の真中に突然赤い灯が輝き出して、乗合自動車が駐つたので、其方を見ると、二、三輛連続した電車が行手の道を横断して行くのである。踏切を越えて、町が俄に暗くなった時、車掌が「曳舟通り」と声をかけたので、わたくしは土地の名のなつかしさに、窓

硝子ラスに額ひたいを押付けて見たが、木も水も何も見えない中に、早くも市営電車向嶋の終点を
通り過ぎた。それから先は電車と前後してやがて吾妻橋をわたる。河かわむこう向こうに聳えた松屋
の屋根の時計を見ると、丁度九時……。

昭和十一年四月

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 五」岩波書店

1982（昭和57）年3月17日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寺じまの記

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>